ミステリー小説で見るスウェーデンの福祉

ばおばぶ代表　五十嵐正人

はじめに

福祉の先進国。それが日本人の多くが持っているスウェーデンのイメージではないだろうか。それを否定しようという意識があるわけではないが、あまりにも軽々しく語られすぎているのではないかという危惧を抱いている。

スウェーデンをはじめとしてデンマークなど北欧の国々はノーマライゼーションという言葉で語られることが多い。しかしそれは日本で言われているノーマライゼーションと、本当にイコールなのだろうか。北欧の福祉が取材されるとき、わたし達に語りかけてくる現地の人たちは、その国に暮らす様々な境遇の人々を広く網羅しているのだろうか。移民であったり、何らかの事情で北欧の先進的福祉が届いていない人たちの声は、日本に聞こえてきているのだろうか。あるいは、そうした境遇の人々はノーマライゼーションの国々にはまったく存在してはいないのだろうか。

存在しているとしたなら彼らの声に触れて、福祉先進国の実態をより深く知るにはどうしたらよいのか。最善の方法は自ら北欧諸国の言語を学び、対象諸国を隅々まで取材し尽くすことなのだろう。しかし、それが不可能であることはいうまでもない。そこで現在取り組んでいるのが、日本で翻訳され入手可能な現代北欧ミステリー小説を読み、そこで書かれている福祉の描写、有り様を見ていくという試みである。

対象にミステリー小説を選んだのは、それがＳＦでも歴史小説でもなく、現代を描いているからに他ならない。加えて日本語に訳され、入手可能なテキストの数が、ミステリー小説に絞ることで適度に限定されることも大きい。そうした作品はそれぞれの国で多くの読者を獲得しており、権威ある賞を受賞しているものも少なくない。それらの点から、描かれている社会福祉の姿は、少数意見かもしれないが、それでも当該国民に認知されている実体の一面だろうと推測される。

まだ始めたばかりの作業であり、論文と言うほどには深まってはいない。また、どこまで研究を進めても、私があたることが出来るテキストは日本語訳に限られる。こうしたことから、試論の域を出ないものなのだが、北欧の先進福祉をより深くイメージする一助にでもなればと思っている。北欧の国々の中から、特にスウェーデンのミステリー小説を取り上げるのは、日本語訳されている作品数が多いからだ。

なおこの試論は、私が行なっている民間個人運営の総合支援法外事業所「ばおばぶ」の通信に書いたものを大幅に加筆修正したものからのスタートになる。「ばおばぶ」の通信では、テーマごとに複数の作家の複数の作品に言及したが、ここでは可能な限り作家ごとに論じていく形をとろうと考えている。当該ミステリー小説を読んでみたくなった人にとっては、読書案内としても機能するようにという思いからだ。この点からも、これが試論にとどまることを理解してお読みいただければ幸いである。

第１回　スティーグ・ラーソン
後見は解除が目標？！

スティーグ・ラーソンについては、その著書『ミレニアム』三部作の「訳者あとがき」に詳しく書かれている。ここでは第一作目『ミレニアム１　ドラゴン・タトゥーの女』（以下『ドラゴン・タトゥーの女』と略す）の「訳者あとがき」（ヘレンハルメ美穂）から引用しよう。早川書房版である。

> 著者スティーグ・ラーソンは一九五四年、スウェーデン北部のヴェステルボッテン県生まれ。ノルシェーという小さな町の近郊で少年時代を過ごした。その後ストックホルムに移り、スウェーデン通信に二十年間勤務するかたわら、極右思想や人種差別に反対する運動にかかわり、一九九九年からはこうしたテーマを専門的に扱う雑誌ＥＸＰＯの編集長となった。

日本のとりわけ障害福祉の分野において、ノーマライゼーションのシンボルとして強く印象づけられているスウェーデンでの大型入居施設の解体。それが１９８０年代に始まったことを考えると、スティーグ・ラーソンはそのジャーナリスト人生の真っ只中で福祉の変革を目にしていたことになる。

そんなスティーグ・ラーソンのミステリー小説といえば『ミレニアム』三部作だ。これについても同「訳者あとがき」からの引用をしておく。

> 三部作は本国スウェーデンで大変な人気を博し、第一部の刊行から二〇一一年六月までに合計三百六十万を売り上げる大ベストセラーとなった。スウェーデンの人口が約九百万人であることを考えると、これは驚異的な数字だ。（中略）第一部『ドラゴン・タトゥーの女』と第三部『眠れる女と狂卓の騎士』はいずれもスカンジナヴィア推理作家協会が北欧五カ国で書かれたミステリの最優秀作に与える「ガラスの鍵」賞を、第二部『火と戯れる女』はスウェーデン推理作家アカデミー最優秀賞を受賞している。

このようにスウェーデンで、そして北欧五カ国で受容されている『ミレニアム』だが、私が特に興味をそそられたのは三部作を通して進行する、一人の登場人物の境遇である。彼女の名はリスベット・サランデル。わけあって被後見人となっている女性だ。第一部のタイトル『ドラゴン・タトゥーの女』、その人である。

『ドラゴン・タトゥーの女』のストーリーは「ミレニアム」という雑誌の発行責任者であるミカエル・ブルムクヴィストを中心に展開していく。ある企業のスキャンダルを掲載したところ、名誉毀損で訴えられ有罪になったミカエルは、一時「ミレニアム」から離れることになる。そしてその離脱期間中に、ミカエルは古い事件の解明を依頼され……。そのミカエルに協力して活躍するのがリスベット・サランデルだ。

リスベットは二十代。フリーの調査員として警備会社の仕事を請け負っている。インターネットについて天才的なスキルを持っていたり、とにかく個性的な女性だ。彼女の生い立ち、幼少期は恐ろしく複雑、壮絶であり、精神疾患を理由に後見人を付けられている。この後見人の制度が、日本のそれと大きく異なっていることが、私には興味深いのだ。リスベットは『ミレニアム』三

部作を通して、自身に付いている「後見人」の解除を求め続ける。これは付いている後見人を別の誰かに変えて欲しいという訴えではない。私には「後見人」そのものがいらない、という主張なのだ。

念のため、このミステリーの舞台が福祉先進国とされる現代のスウェーデンであることを記しておく。『ドラゴン・タトゥーの女』には、主人公のミカエルについて「ミカエル・ブルムクヴィストは一九六〇年一月十八日生まれで、まもなく四十三歳になります」と書かれている。すなわち三部作は２００３年以降のスウェーデンで進行している現代のミステリーだと考えて間違いない。

さて余り知られていないことだが、日本の成年後見の制度でも、理論上は「後見人」を外すことは可能だ。しかしそれは後見制度の大前提にはなっていない。日本の場合はむしろ逆で、一度成年後見の制度を使ったら永遠に後見人を外すことは出来ない、という感覚に支配されている。これに対してスウェーデンには、後見人を外すことが出来る、あるいは出来ることなら外すべきだという意見があり、後見は外すことが出来るという前提のもとに制度が存在していると読み取れるのだ。

本文中にスウェーデンの後見制度を説明する箇所があるので、引用しておこう。

> 一九八九年以降、成年に達した者に関して、”無能力者”という概念はもはや存在しない。
> いま存在するのは、特別代理人と後見人、この二種類の制度である。
> ”特別代理人”とは、さまざまな支払いや自分の衛生管理などといった日常的活動を何らかの理由で行なうことのできない人々を、ボランティアのような形で支援する人物だ。一般に親族や親しい友人が指名されることが多い。そうした身寄りがない場合には、福祉担当当局がふさわしい者を選ぶこともある。特別代理人制度はいわば穏やかな後見人制度であり、”本人”－いわゆる無能力者－には自分の財産を使う自由が認められ、またさまざまな決定は特別代理人と共同で下すことができる。
> ”後見人制度”はこれよりはるかに厳格な制度だ。被後見人は自分の金を自由に使う権利、さまざまなものごとを自分で決める権利を奪われる。規定の文言をそのまま引用すれば、後見人は本人の”法律行為”すべてを代理で行なう、とある。

１９８９年というのはスウェーデンにおいて、それまであった禁治産宣告制度が廃止されて管理後見人制度がはじまった年だ。それ以降、スウェーデンでは「無能力者」という概念を生み出していた禁治産者の制度がなくなり、特別代理人制度と後見人制度がはじまった。リスベットに付けられたのは後者の後見人の方であり、日本でいうところの成年後見人に近いものだと思われる。その点で誤解して欲しくないのは、リスベットが後見人制度の解除を望む理由が自由という権利の回復にあるということだ。彼女に後見人が付いたのが未成年の時であり、今は成人したから外してくれというのではない。あくまでも彼女にとっては自由のための戦いなのだ。

> 自分の生活を管理する権利、つまり銀行口座を管理する権利を人から奪うことは、民主主義の下でなされうる最も侮辱的な措置と言っていいだろう。その人物が若いのであればなおさらだ。その意図が善意に基づくものであり、社会的にも正当とみなすことができるとしても、侮辱的な措置であることに変わりはない。このため後見人制度はきわめて微妙な政治的問題

をはらんでおり、厳格な規定に守られ、後見委員会の監督を受けている。後見委員会は県庁に所属する機関であり、国会オンブズマンの監督を受けている。

日本では後見制度を、ただただ素晴らしいシステムと思い込んでいる人が多いのではないだろうか。引用の言葉を借りるなら「その意図が善意に基づくものであり、社会的にも正当とみなすことができる」で思考停止している日本人が大半のように思われる。これに対してスウェーデンはまったく逆のイメージで後見制度を捉えているのだ。「侮辱的な措置であることに変わりはない」と言い切っているのである。

もちろん日本でも後見制度について慎重な声は聞かれる。しかしそれらは「後見制度を付けると、こんな損をする」みたいな、損得にまつわる話がほとんどで、人間の尊厳に関わるような、およそ哲学と呼んでもいいような根源的な疑問とはほど遠く感じられるのだ。

スティーグ・ラーソンは、さらにこうも書いている。

後見委員会には、後見の解除を求める申し立てをすべきかどうか、年に一度調査を行なう義務がある。

申請主義一辺倒の日本なら、さしずめ本人からの申し立てを待つのだろう。そのうえ本人が禁治産者ではないにしても非後見人であるのだから、その申請自体が受け入れられる期待は限りなく小さいのだろう。これに対してスウェーデンでは「県庁に所属する機関であり、国会オンブズマンの監督を受けている」後見委員会なる組織が、後見の解除を求める申し立てをすべきかどうか調査しているというのだ。それも年に一度。ここには必要にせまられて行使されている後見人制度について、必要なければ解除すべきだという意識が見える。なぜならば後見制度は「民主主義の下でなされうる最も侮辱的な措置」に他ならないのだから。

『ミレニアム３　眠れる女と狂卓の騎士』にはこんな記述もでてくる。

「後見を解除できるなら、それは私たち後見委員会にとっても願ってもないことです。しかし残念ながら、私たちには現行の規則に従う責任があります。委員会としては、まず規則にのっとった形でリスベット・サランデルの精神鑑定を行ない、彼女が健康であるという結論が出された時点で初めて、後見のあり方を見直すよう要求しております」

リスベットに対する裁判での、後見委員会メンバーの証言だ。どちらかというと、リスベットに対して厳しい感情を抱いている人物の証言なのだが、それでも「後見を解除できるなら、それは私たち後見委員会にとっても願ってもないことです」と言い切っている。

この裁判はリスベットの後見解除に関するものではなかったが、裁判の流れの中でリスベットの後見解除が決定される。彼女は自由を取り戻したのだ。

なお、このように後見そのものを解除することが出来るのはスウェーデンだけではないと思われる。日本では２０２１年にＡＸＮミステリーで放送がはじまった『アストリッドとラファエル文書係の事件録』というフランス発のミステリーがあった。私は翌２０２２年放送のＮＨＫ総合での吹き替え版で視聴したのだが、そのシーズン１最終回でのことである。タイトルになっているアストリッドはパリ犯罪資料局の文書係で、自閉症という設定。そのため後見人がつけられて

いたのだが、やはり後見解除が実現したのだ。他の国の事情は分からないのだが、あるいはヨーロッパにおいては、解除可能な後見制度を持つ国が他にもあるかもしれない。

せっかくなので『ミレニアム』三部作に書かれている、後見制度以外に関する記述にも触れておこう。まず『ミレニアム２　火と戯れる女』から引用を二箇所。

> 「スウェーデンには、売買春に関するひじょうに厳しい法律を定めた政府があります。その法律が遵守されるよう目を光らせている警察があります。性犯罪者を裁く裁判所があります（中略）さらには、この問題について義憤をあらわにするマスコミもあります。それにもかかわらずスウェーデンは、一人あたりに換算すると、ロシアやバルト三国出身の売春婦をほかのどの国よりも多く買っているんです」

スウェーデンの売買春に関する記述だが、これを日本の障害者虐待に置き換えたらどうだろう。２０１２年１０月から日本でも障害者虐待防止法が施行されている。「厳しい法律」とまでは言えないにしても、警察、裁判所、マスコミは揃っている。にもかかわらず障害者虐待が減少したという実感はない。「津久井やまゆり園」での殺傷事件にしても防止法施行後の２０１６年のことだ。障害者虐待にかぎらず、差別解消法など、ノーマライゼーションの波の中で成立した法律やシステムについて、日本でも厳しく評価する視点が必要なのではないだろうか。

> 経費節減のせいで精神科病院がいくつも閉鎖に追い込まれ、明らかに治療を必要としている人々が、放っておけばホームレスになったり社会福祉当局の世話になったりするのがわかっているのに、無責任にも見捨てられた、というのがその言い分だった。

これは一人の精神科医の意見として発言されたものだ。注目すべきは精神科病院の解体の善し悪しではない。私たち日本人にとってノーマライゼーションの象徴とも見られている病院の解体が、「経費節減のせい」だと断定されていることだ。むしろ私たちが、病院の解体を経済問題と切り離した美談と思っていることが間違っているのか。「経費節減のせい」ばかりと言い切るのはいささか穿ち過ぎであるにしても、日本における障害福祉の改革については、もう少し経済的視点から論じる必要があると思われる。

この精神科医の主張は少数意見かもしれないが、まるっきりの妄想というわけでもないようだ。『ドラゴン・タトゥーの女』には、リスベットと仲間のハッカーとのこんなやり取りがある。

> 「ぼくは障害年金を受け取ってる」とプレイグは言った。「正常な社会生活ができないんだよ」
>
> 「それで国はあなたに住むところだけあてがって、あとは知らん顔ってわけ。でも、近所の人から苦情が出て、社会福祉局が様子を見に来たらどうしようって思うことない？　精神病院に入れられることになるかもよ」

プレイグはインターネットについては天才だ。しかしニートのような状態で暮らしている。正常な社会生活ができない場合、周りに迷惑が掛からないように生きられなければ選択肢は三つ。

ホームレスか社会福祉局の世話になるか、精神病院に入れられるか。同じ作者が書いたものなので同様の内容になっているのは当然だが、メインキャストの一人であるリスベットに語らせるのは、それがある程度の数のスウェーデン国民に認知されている考え方だからではないだろうか。そして日本の社会福祉の状況だと言われたとしても、私には違和感はない。

ところで作者のスティーグ・ラーソンだが、残念なことに２００４年１１月に亡くなっている。『ドラゴン・タトゥーの女』の「訳者あとがき」には「最終的には十部作とするつもりだったようだ」と書かれている。そのためスティーグ・ラーソンによる『ミレニアム』はこの三部作まで。現在、日本語訳で購入できる四部以降の『ミレニアム』はダヴィド・ラーゲルクランツによるものだ。

後見人を解除できるものとするか否か。その判断の岐路は「侮辱的な措置であることに変わりはない」ことに気付くかどうかにあるのだろう。そのことを『ミレニアム』三部作は教えてくれている。そしてもう一点、深読みに過ぎるかもしれないのだが、私には一つ考えさせられることがあった。

先に引用した部分に「委員会としては、まず規則にのっとった形でリスベット・サランデルの精神鑑定を行ない、彼女が健康であるという結論が出された時点で初めて、後見のあり方を見直すよう要求しております」との記述がある。これは日本でも同じだろう。しかしスウェーデンでは後見人の解除が望ましいこととされているのに、日本では後見人の解除など考えられないことになっている。この違いの原因は何なのか。

リスベットがプレイグに言った科白、「でも、近所の人から苦情が出て、社会福祉局が様子を見に来たらどうしようって思うことない？」。問題はプレイグ自身が医学的に抱えている生活しづらい症状ではない。何らかの理由で地域社会が苦情を申し立てるかどうなのかだ。つまり「障害」を医療モデルととらえるか、社会モデルととらえるかの違いである。「医療モデル」は障害をその個人の心身機能の問題として考え、「社会モデル」はこれに社会の有り様を加えて考える。このどちらが正しいかの答えはすでに出ていて、２００６年国連で採択された「障害者権利条約」には「社会モデル」の考えが取り入れられている。障害は本人の心身機能の問題だけではなく、社会の状態にも左右される。つまり障害という課題に対して社会は大きな責任を持っているのだ。だから後見人制度を監督する後見委員会は医療チームではなく、県庁に所属し「後見の解除を求める申し立てをすべきかどうか、年に一度調査を行なう」のである。

リスベットが後見を解除できたのは、その元々の医療的判断がずさんだったことにもよるが、それ以上にリスベットが社会で生きていく力を持っていることの証明が大きかった。それがすなわち障害を「社会モデル」としてとらえると言うことなのだ。

後見人制度を「民主主義の下でなされうる最も侮辱的な措置」だと言い切るスウェーデンの福祉の裏には、障害を「社会モデル」ととらえる先進性と、そうだからこそ障害を持っていても不自由なく暮らせる社会を作らなければならないという理念があるのだろう。

残念なことに、後見解除の目標を持たない日本。はたして日本は「社会モデル」の考えを、世界と共有してはいないのだろうか。いや、断じてそんなことはない。日本は２０１４年に「障害者権利条約」を批准しているのだから。それでいながら後見人制度においては「医療モデル」のまま解釈し続けているのだとしたなら、法治国家を名乗る先進国としては怠惰に過ぎるだろう。一刻も早く法制度における「障害」の解釈を「社会モデル」に統一するべきだ。

そしてもしも後見人制度においても障害を「社会モデル」ととらえているのなら、それなのに後見の解除に後ろ向きなのだとしたなら、それはどういうことなのだろうか。この問いの対する理論上もっとも整合性のある答えを考えてみる。日本の国は、障害を持つ人が暮らしやすい社会を作ろうなどという気持ちを、まったく持ってはいないということなのだろうか。

この項の終わりに、『ミレニアム』三部作を読んで私が得たものを書いてみた。

（次回に続く）

スティーグ・ラーソンのミステリー小説

『ミレニアム１　ドラゴン・タトゥーの女』（上）（下）　ヘレンハルメ美穂・岩澤雅利訳　ハヤカワ・ミステリ文庫

『ミレニアム２　火と戯れる女』（上）（下）　ヘレンハルメ美穂・山田美明訳　ハヤカワ・ミステリ文庫

『ミレニアム３　眠れる女と狂卓の騎士』（上）（下）　ヘレンハルメ美穂・岩澤雅利訳　ハヤカワ・ミステリ文庫

※２０２３年現在、筆者が確認した文庫版で入手可能な日本語訳を紹介している。